

讀。讀多自然曉。今只思量得寫在紙上底。也不濟事。終非我有。只貴乎讀。這箇不知如何。自然心與氣合。舒暢發越。自是記得牢。縱饒熟看過。心裏思量過。也不如讀。讀來讀去。少間曉不得底。自然曉得。已曉得者。越有滋味。若是讀不熟。却沒這般滋味。而今未說讀得注。且只熟讀正經。行住坐臥。心常在此。自然曉得。昔思之。讀便是學。夫子說學而不思則罔。思而不學則殆。學便是讀。讀了又思。思了又讀。自然有意。若讀而不思。又不知其意味。思而不讀。終是籠籠不安。一似債得。人來守。屋相似。不是自家。終不屬自家使喚。若讀得熟而又思得精。自然心與理一。永遠不忘。某舊苦記文字不得。後來只得讀。今之記得者。皆讀之功也。老蘇只取論語孟子韓子與諸聖人之書。安坐而讀之者七八年。後來做出許多文字如此好。他資實固不可及。然亦須著如此讀。只是他讀時。便要摸寫他之語做文章。若移此心與這樣資質去。講究義理。那裏得來。是知書只貴熟讀。別無方法。

## 一、輪島の水主共朝鮮漂着談

今度朝鮮國へ漂着の拾二人の水主共、粗覺え申分左の通。

こに上り何も打寄只忙然として罷在候。其内に少し氣も付申者有之に付、扱十四人の水主皆々上り候哉と相改候處、十二人ならでは無之候。兩人は定ててんま船打返候節、溺死仕候と覺候。扱此所はいか成所に候哉山有之候。其節山邊より海迄間も有之、此間に知有之候を見れば、日本に有之候様成大豆なども植て有之候に付、扱は人家も有べしと何もひとかたまりになり、道らしき所を指て山端を廻候へば、人家見え申候に付、何も悦び其方へ罷越候へば人來り候。日本にあらず其形恐敷しく、其人も此方を見て驚き申鉢に付、扱は日本の内にては無之、いか成所に候哉と何もあきれ果罷在候處、水主共の内より手を合て見せ候へば、うなづきたる氣色にてそばへ寄、右の家の方へ連行、其傍に小き納屋有之、其内へ十二人の者共を入れ、程なく糝をくれ申候。其器物も日本にて見馴不申、しんちゆうの椀に匕を添出申候。其夜は右納屋にて明し、燒火をしてあて申候。翌日右の上り候濱へ連行候故、指さしして見せ候へば、折節破損船の板なども打上られ有之に付、其板などにて唐人共其所に小屋懸仕候て入置申候。二三日此所に罷在候内、

辰七月九日能州輪島町兵右衛門と申船持、越中東岩瀬にて南米八百石餘積請候を、大坂へ相廻申候。水主拾四人乗せ、同日輪島出帆仕候處、順風にまかせ同月十八日長州沖中迄馳登申候處、俄に辰巳の風吹替り、次第に大風に成候故帆も下し候。彌危成候に付沖の嶋と申所見請候故、何とぞ此島へ漕寄申度に付、様々舵を取り何も手を碎き申候得共不相叶故、拾四人の水主共覺悟を極め、最早難叶に付打米仕申内、早船は遙に馳引き方角も見失申故、何國の沖に候哉氣力も疲れ、殘米打捨候へば精力も衰申に付、一俵の米に三四人も懸り、とやかくと仕候内、次第に波は高く、船より一丈餘も高く打懸候様にて、最早船に水も入り途方を失ひ罷在申候折節、山見え候に付氣付候へ共、何國の山に候哉無覺束、彼此仕候内にも何とぞ帆柱を伐捨度、帆柱を伐り申半に瀬に掛り、終に破船仕候に付、つなぎ置候てんま船に拾四人共乗移り、三四里程も馳行申と覺候處に、是も又打返し候故、右の船に取付、又は破船いたしたる船板などに取付、波に漂ひ磯間を近く、漸と一人二人宛上り、皆々息をつき居申所、同十八日七時にも及申様に覺申候、爰かし

見物に罷越候唐人共夥敷事に御座候。馴々敷そばへより、水主共耳鼻をせり、灸治の跡を見て不審仕候様子に御座候。如何成事にてか取行可申と、水主共案じ煩罷在候處、折々給物麥食、又は日本の通食も給させ申候。二三日過候へば代官と覺しき人、日本にて見馴不申道具を爲持大勢來候て、十二人の者共打詠め居申所、右磯へ上り候節、能州所口淺井織江殿よりの舟關の通札、首に懸上り候に付、其時も首に懸け居申候を見て、右代官取見申候。よめ申候哉、日本にて歌よみ申様に、くどくと申候。迎も通じ不申に付、如何御座候哉又相返し申候。扱夫よりは船を出し、十二人船に乗申候。

一、四五日も立候得ば、日本人と覺しき人兩人來て、委細を問申候に付、右始終不殘答申候處、我々は對州よりの通詞也。此所朝鮮國慶尙道の内長響と云所なり。是より四十里あなたウワンカイと云所有り、其ウワンカイへ船送にて可歸候間、氣遣致間敷候。夫より對馬國へ送り、夫より大坂へ可相返候。我兩人の内、一人は對馬へ歸り右の趣訴に罷越候。一人相殘候て其方共を連行候。右の趣訴に被申